泣くな。復讐しろ。

この土曜日は、奈良県からお客さんが我が家に来ました。
彼は、今から 12 年前の渡辺学級にいた教え子です。
その時も、私は４年生を担任していました。
みんなと同じ 10 歳の頃に一度だけ担任したその教え子は、既に大学 4 年生。22 歳になっていました。
大学を卒業するにあたり、人生の岐路に立っている局面でどうしても先生の話を聞きたいということで瀬戸まで遠路はるばるやってきたのでした。
「高校 3 年生の頃もそうだったんですけど、人生の決断というか節目の時になぜか先生の話をもう一度聞きたくなるんですよね。」
と彼は話していました。
そういえば、確かにそうだったなぁと当時を思い出しました。
彼が高校３年生の頃です。
ある日、一本の電話がかかってきたことがありました。
当時の学級通信にそのことを書いていたので、抜粋します。
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝引用ココカラ＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
一昨日の夜、突然電話が鳴った。（書いていて気付いたが、電話はいつも突然鳴るものである。）
ディスプレイには、知らない番号が映し出されている。
間もなく寝ようかと思う頃だった。（いつも大体 8 時には就寝する。）
「はいもしもし」と出てみる。
すると、「先生お久しぶりです！8 年前に 4 年生で一回だけ担任してもらった〇〇です。突然の電話すいません！」と力強い声が聞こえてきた。

小学生の時より、声は低く太くなったが、間違いなく教え子の声だった。
聞けば、先生に話したいことが２つあって電話してきたという。
その最初の話に出たのが、「ビブリオバトル」だった。
簡単に言うと、「書評のトーナメント戦」である。
互いに、自分のお気に入りの本を持ってきて 5 分間で書評をスピーチする。
より聴衆の胸に響いた方がトーナメントを勝ちあがる。
こういう仕組みだ。
「僕、ずっと読書とか興味なかったんですけど、1 冊の小説を読んでから一気に読書にはまったんです。それで、このビブリオバトルに出てみようと思って。それで県大会に出てきました。負けはしちゃったんですけど、戦った相手が持ってきた本が『くちぶえ番長』だったんです！その書評を聞いてる時に、そういえば 4 年生の頃に渡辺先生に進めてもらって俺夢中で読んでたなぁって。思い出したら、あのくちぶえ番長だけは小学校の頃に読めてたなぁと思いだしたら、先生にこの話を伝えたくなったんです。」
その子は一気にまくしたてるように語った。
私は、ウンウンそうかそうかとずっと笑顔で相槌を打つ。
くちぶえ番長。
懐かしい。
私の大好きな重松清の作品である。
学級文庫においてあったはず…と探してみたが、残念ながら番長の姿はそこにはなかった。
誰かが持って行ったままになっているのかもしれない。
が、別にそれでいいだろう。
きっと、番長は番長の仕事があるのである。
６年前の通信にもこんな事が書かれていた。

『せんせい』重松清著 新潮文庫 2011 年

小説の舞台としてしばしば学校が登場する作家、重松清。
「僕の描くお話に登場する大人の職業は、9 割以上が教師」と著作で述べるほど、学校を舞台とする作品が多い。お気に入りの小説家の一人である。
『くちぶえ番長』『流星ワゴン』『再会』などをこれまでに読んだことがあり、今回の『せんせい』は 6 人の教師が登場する短編小説集であった。中でも、「マティスのびんた」は夢を描くことの素晴らしさと儚さを感じさせる作

品である。「泣くな赤鬼」のラストは涙なしには読めなかった。尚、先の『くちぶえ番長』は小学生にもオススメである。もし、興味があったら読んでみてほしい。

高校３年生のお兄さんが熱く語る姿が全てを物語っている。
この作品は、とにかく面白いのである。
尚、番長と聞いて男をイメージしたそこのあなた。
それは違うのだ。番長は、小学５年生の女の子である。

ビブリオバトルの件に興味があったので、彼に映像は無いかと尋ねてみる。
「高校の先生に聞いてみます！」と教え子。
すると翌日（それが昨日）、映像が送られてきた。
教え子が書評に選んだ作品は、「復讐」がメインテーマの作品だった。
随分難しい素材を選んだなぁ、と率直に思う。
でも、そうした難しさをいとわず挑戦するのがその子の良いところだ。
映像を全部見てから、すぐ返信した。
高校生と、どんなやり取りをするのか、みんなも興味があるだろう。
せっかくなので、紹介する。

全部じっくり見せてもらいました。
勇輔、ホントに大きくなったね。
先生はまずそれが一番嬉しいです。
チャレンジングで積極的な勇輔のカッコいいところが、高校生でもちゃんと活かされてて、先生は終始ジーンとしながら見ていました。
ビブリオバトル、初めて見ました。
これは面白い！と見た瞬間に思ったよ。
で、感想だけど、中々勇気ある素材を選んだね。“復讐”という素材は、万人には中々受け入れられない素材だからです。
多くの人は、「復讐なんかしなくて良い」という、多数派の意見であるように自分では感じているだろうと思います。でも、それは少し違っていて、今回勇輔が読んだ話に出てきたような復讐ではなくとも、いろんな形で結構みんな復讐をしています。
悪口・陰口なんかはその典型。SNS に攻撃的な書き込みをするのも一種の復讐だし、ケンカで相手にダメージを与えるのもそう。
別に大人だけじゃなく幼稚園に通う小さな子でもそういうことをします。

せっかく映像を見せてもらったので感想&アドバイスをすると、この辺り
の「復讐は良くないこと。これに賛成の人はいますか？（手を上げさせる）
でも、復讐って日常的にみなさんしていますよね」って言うところから、いかにみんなの周りにも大なり小なりの復讐があるかを話すのも面白いかと思いました。
その上で、「でも世の中には、理不尽な形で被害に遭う人が後を絶たず、そうした人たちには望む形での復讐は許されていません」のように話を持っていくかな。
勇輔、ハンムラビ法典って習ったかい？約 4000 年前にできた法典です。
もっとも有名なフレーズが「目には目を歯には歯を」です。つまり、復讐の歴史はこんなに古いんだという事です。
でも、近代法では軒並み私的報復は禁止されていて、それは法の根本原理でもあります。
なぜ私的報復が禁止されているのか、その辺りを調べると勇輔の話にさらに深みが出ると思います。
日本人はね、復讐っていうことを大っぴらに言えない・言わない民族です。
それは日本の地理的にも歴史的にも色んな要因があってそうなっています。
だから、この本でビブリオを戦うのは勇気がある選択だと思っています。（日本には復讐に関する言葉や慣用句がほとんどありません。むしろ、因果応報、自業自得、身から出た錆、みたいに結局自分次第なんだよっていう言葉は多いです。）
先生がもし審査員なら、その勇気ある選択の部分を間違いなく評価したと思うし、実際にその大会でも同じような素材で戦う参加者は少なかったんじゃないかな。でも、勇輔がここまで一冊の本を熱く語れるようになっていて、改めて先生は感動しました。

最後に、一つことわざを紹介します。どこの国のものなのか、気になったら調べてごらん。
そのことわざはね
Don’t cry. Just revenge.
というもの。

意味は
「泣くな。復讐しろ。」
いかにもストレートなことわざなんだけど、これには続きがあります。
The best revenge is to live well.
「最高の復讐とは、あなたが人生を幸せに生きることだ」
「復讐には反対」っていう勇輔の主張に先生も賛成です。
素敵な映像をホントにありがとう

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝引用ココマデ＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ちょっと長くなりましたが、彼と 12 年ぶりに会って話した内容にも、「1冊の本」が出てきたり、「ビブリオ」の話題になったりすることがあるということです。

「くちぶえ番長」も、すでに 12 年前の段階で私は教室で進めていたということですね。

そして、人生の様々なシーンでこんな風に語らえたり、乾杯出来たりするこの仕事はなんて素晴らしいんだろうと改めて思ったのでした。

みんなも、大きくなったらぜひ一緒に乾杯しましょうね。

大きく成長した４－１のみんなが、大人になった時にどんなことを話してくれるのか、今からとても楽しみです。

☆↓読者ページはこちらから↓☆ご意見ご感想など気軽にお寄せください

https://docs.google.com/forms/d/1qqf4cPLcjpcWaimWdu-6lFM73JahODYK4ROldg7jLxM/edit